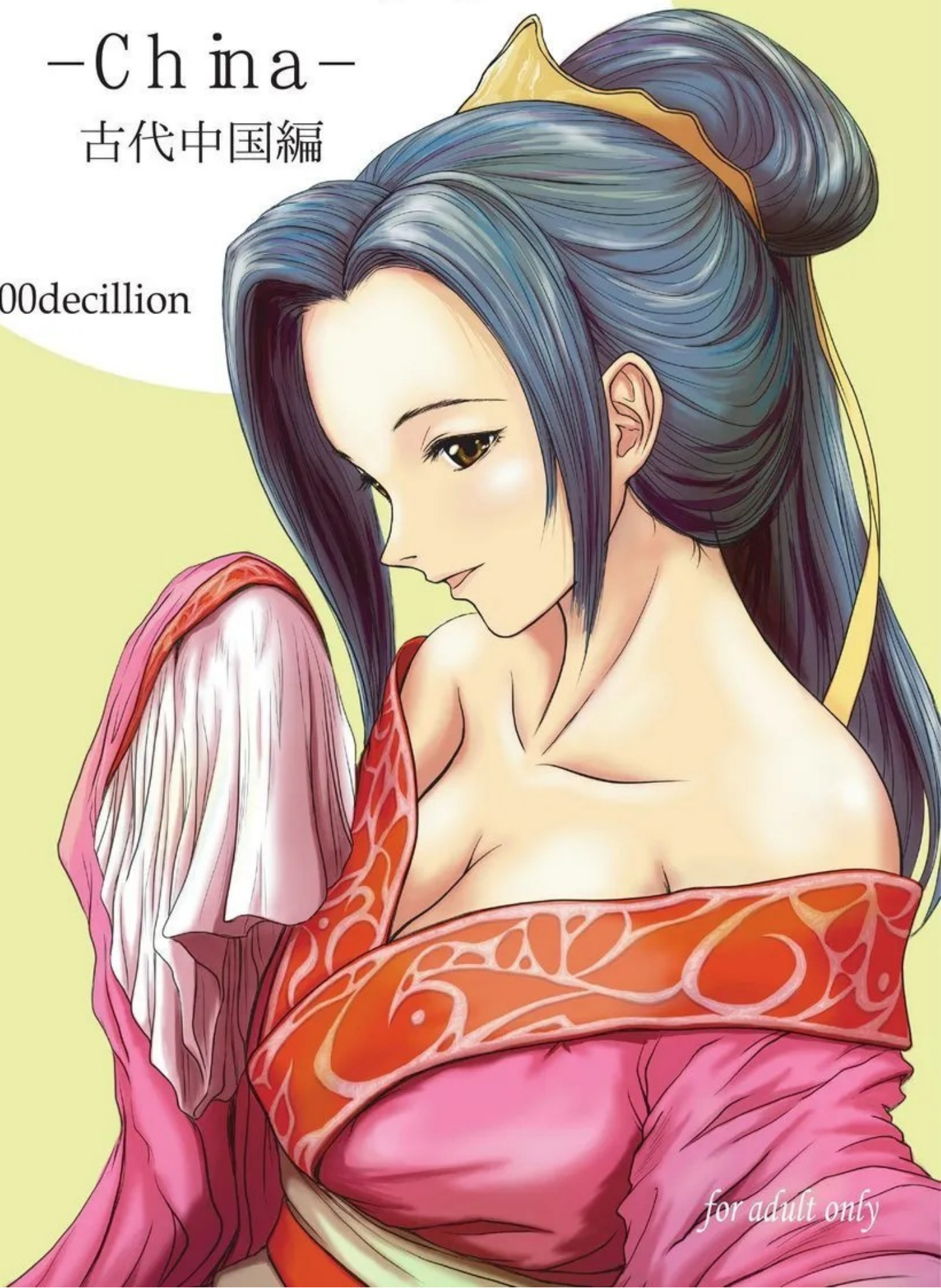


Morals under a pagoda

—C h i n a—

古代中国編

1000decillion



for adult only

年 表

	夏	- 纏足と一夫多妻の慣習編- - 宦官のこと編-
BC1500頃		
	殷	
BC1000頃		
	西周	
BC770頃		
	春秋時代	
BC400頃		
	戦国時代	
BC221		
	秦	
BC202		
	前漢	
AD8		
	新	
AD25		
	後漢	
AD220		
	三国時代	



Morals under a pagoda

古代中国・1

—— 纏足と一夫多妻の慣習 ——

春秋時代、中国。さる窮した良家の娘が、裕福な家に嫁ぐ。嫁入り際にそれに付き従うのは、その従姉妹と下女たち。貴人の中では新婦に伴われた若い女たちは、そのまま主人の妾とできた。娘が嫁いだ主人も、やがて彼女の下女のひとりに目をつけ、寝所に入れるようになる。

そしてそんな女たちが行っていた纏足。

小さく作り上げられた足は、それならではの男のフェティシズムをも育て、纏足の良し悪しを審美する価値観や言葉、小脚そのものを愛でる性的技巧もさまざま発展した。







古代エジプトでも妻妾に履物を履かせないことで、家だけで活動するよう仕向けたという。



纏足は3~4歳から足の親指を除く四指を足底の方に折り曲げて布できつく縛ったうえ、小さい靴を履かせて発育を妨げる。さらに7~8歳で足裏を強く屈曲して脱臼させてしぼり、外観上の足の小ささをさらに保とうとする。足の甲が弓形に盛り上がるので「弓足」ともいい、専用の布靴「弓鞋(きゅうあい)」を履いた。



纏足には、その
見てくれに反して
『金蓮』なんて
ステキな呼びかた
があったな……



この纏足^{てんそく}にも、
エロの
ディープな
世界が
広がって
いるからだ！

ま、まじか！

まじだった
のだよ

※この呼び名は10世紀ごろから？



纏足でエロる
技巧パターンだけで、
のべ四十八種あった
という！

まじかーっ

なんでこういうのは
きまって48なのか



これをエロ開発する
性的秘技を
『玩蓮』なんつって、



おそろしい……
どうなってるんだ
中国エロ……

とまあ、
本編に入る
マクラーとして
のイントロは
こんなもんで
いいか？

それでは
本編をどうぞ

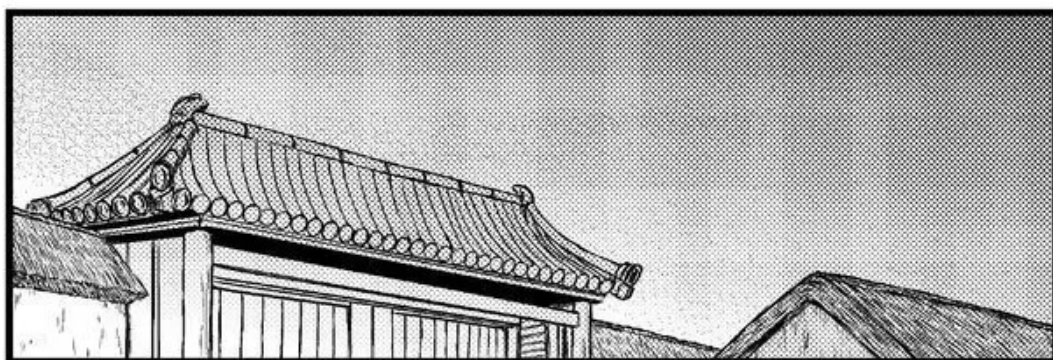
纏足の慣習が生まれた時代については、夏禹説、商代説、春秋説、秦説、唐末説、五代説、北宋説など
さまざまあり定まらない。「三寸金蓮」と異名があるように、かかとから爪先まで約10cmが理想とされた。
こうした纏足は当然 非常に大きな苦痛を伴うもので、その苦痛を表すに「小脚一双、泪水一缸」という言葉も。



春秋時代、
中国

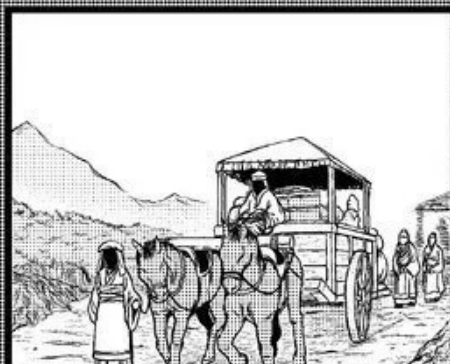














中国では、春秋時代初期には
すでに一夫多妻制が
定着していた。
天子、諸侯はいうに及ばず、
金持ちや商人など力ある男達も
数多くの女を囲って暮らした。

貴族階層では、新婦が嫁入り
する際に共についていく下女が
そのまま後に妾となる形が
制度化されていた（媵妾制度）。



その範疇には新婦の
妹や親戚まで含まれる。
正妻が亡くなったり離婚
した時には、その中から
新たな正妻を物色した。

『詩経』には、新婦が媵妾として
妹や下女を連れて行かなかった
ため、下女がそのせつなさを
嘆いた詩が収録されている。



纏足を行う理由は
さまざまあろうが、
まず一面には好色と
結びついたものだ。



古代の閨房において
女性を人為的に作り、
快楽と耽美にふける
目的から始まった。



小さな足の裏が纏足で
捻じ曲げられ凹んだ様を
女性器に見立て、これを
性行為にも利用して
快楽に耽った。



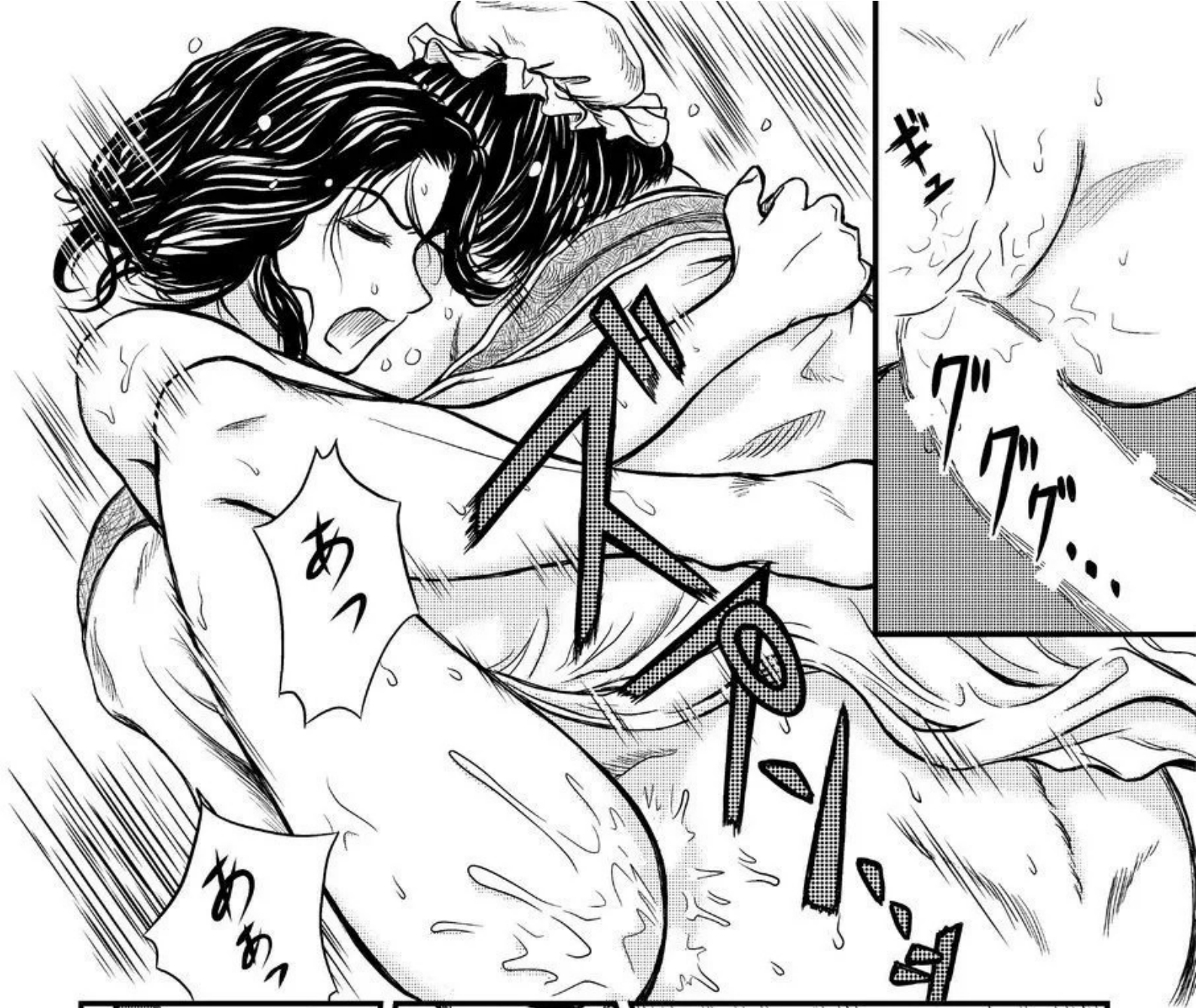


古来の中国の豪華な寝台にはしばしば、足の方に二本の細い柱が立ち、赤い絹に包まれている。
これは何かというと、女の二本の足を高く上げ両側に広げて、金蓮(纏足された足)を高く吊るして
おくためのものだ(上の漫画では大きな支柱を流用しているが)。

>次頁に続く

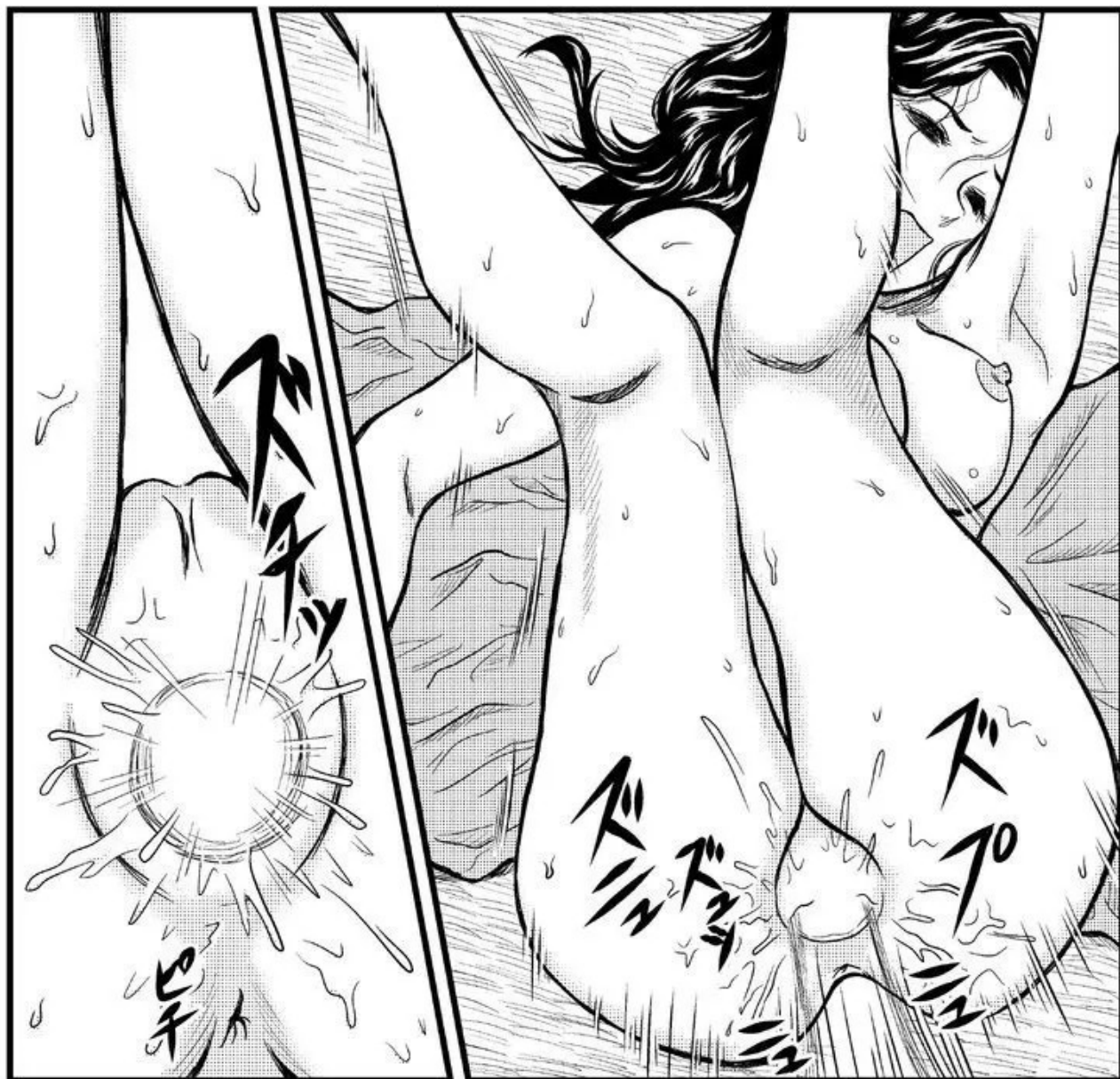


続> 女は自由を「剥奪」され、男の乱暴な愛撫にも抵抗する事ができなくなる。
苦痛と快感が同時に強烈に繰り広げられる状態こそがセックスを場を昂ぶらせるとされていた。
同じような機能を持った寝椅子も存在する。



『剣津翫蓮記』という書は、纏足を女性全身の美の集大成だとしている。そしてハイヒールやトゥシューズを履くのと
同様に女性の股の筋肉を発達させ、性交時の男性の快感を高めるいう。また女性たちも纏足を、男性を誘惑する道具と
見なした。小さな足を見せつける立ち居振る舞いで、纏足耽溺者の心を掴んだのだという。

>次頁に続く



続> また總足のエロチシズム的開発、性的秘技のことを指して、「玩蓮」という言葉がしばしば使われる。玩蓮の技巧には、聴覚的なものが一種、視覚的なものが四種、嗅覚的なものが一種、触覚的なものが四十六種ある(重複したものもあり、のべ四十八種となる)。巻末コラムも参照。

寢室といえどかく
密室を連想しがちだが、
古代中国においては
むしろ隠密性が低く、
開放的とすらいえる。

寢室の壁面は木で編んだ窓が
大きく占めるのだが、これだ
けでは当然、外から簡単に
室内を覗くことができた。
音を遮るものもほぼ無い。





夫婦生活が窓外の他人に
覗かれても、あまり気に
留めなかったのがかつての
この地の寝室であるという。

夫が妻と交わるとき、下女や
愛妾が同室して世話をするの
も
ありふれたことだったという。
中国の春画を見れば、そのような
描写をよく見ることができる。



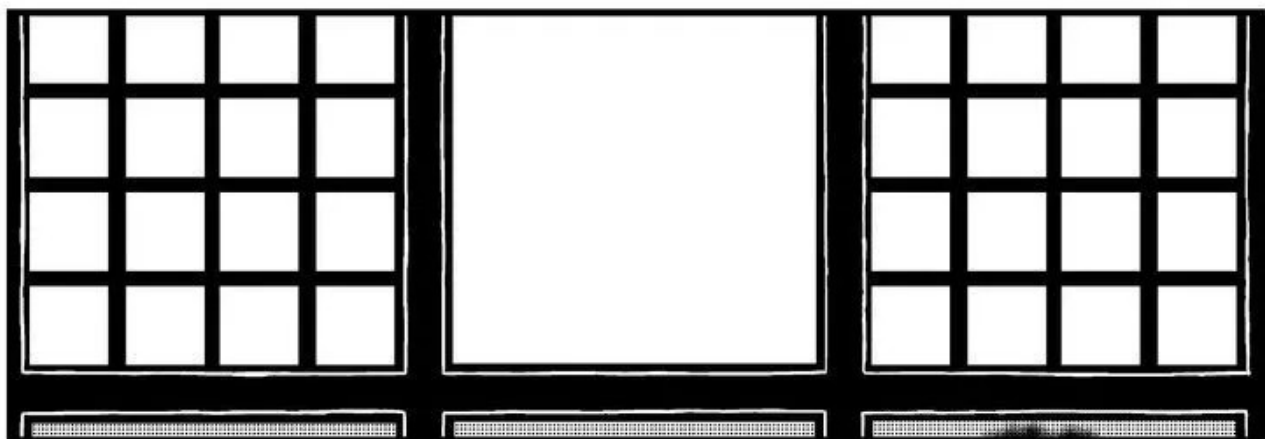
オホオツ

も、もう
果てるぞ――

その足で
果てさせてくれ！

くうっ





完

◆纏足のフェティシズム

他の地では見られない独自の習俗であった女子の纏足。その起源・発生時期ははっきりしないようですが、

中華人民共和国が成立して政府が禁じるようになるまで、長きに渡って続いていた。

纏足はふつう「小脚（小足）」と呼ばれ、美称として

「金蓮」という言葉も用いられた。これは十世紀、南唐の故事に由来するもので、蓮は古来から女性器を暗喩します。

足を小さく作り上げて常に爪先立ちになると、自然に太股や腰が鍛えられて陰部の締まりがよくなり、処女のような感触になるといわれ、いわば第二の性器として纏足は扱われました。だから昔、女性には纏足された素足を秘めた場以外で他人に見せることは決してありませんでした。それは性器を見せることと同じくらい恥だったのです。

そんな纏足だからこそ男のフェティシズム的嗜好が向かいもするわけで、清代の「香蓮藻品」という書には、小さな足の良し悪しを評するのに「肥・軟・秀」の三つの基準を設けています。

「肥」は肉づきよくすべすべしているかどうか、

「軟」はやわらかく美しいかどうか、

「秀」はきりりとして品がいいかどうか

……ということですが、この基準で何をどう評していたものか、正直よくわからないですね現代日本人としては。ちなみに「肥」と「軟」は外見的なことなので努力で得られるが、「秀」は天性のもので得難い、とのこと。

そしてこうなると当然のように、「玩蓮」、すなわち小脚そのものを愛でる性的技巧もあれこれ発展しました。これらを整理された文献があるので引いてみましょう。

●聴覚的なものとして「聴／足音を聴く」

●視覚的なものとして「看／見守る、じっと見る」、

「瞞／遠くから見ると」「窺／盗み見る」、

「視／凝視する」

「承／纏足を男の体の一部（掌、膝、頬など）にのせて見る」

●嗅覚的なものとして「嗅／鼻を素足にあてて嗅ぐ」、

「吸／鼻の穴に爪先を突っ込んで吸い込むように嗅ぐ」

●口に関するものとして「吞／すっかり口に含む」、

「吮／爪先を吸う」「舔／（舌偏に添）舐める」、

「食／足指の間に食べ物をはさみ、それを食べる」

「嚙／軽いかむ」「咬／強くかむ」

●手による技巧として「握／にぎる」「捏／つねる」、

「搔／足の裏をかく」「撈／布団の上から捕まえる」、

「拵／いきなり捕らえて上へあげる」「捻／つまむ」、

「ほじる／足指の間に手指を入れる、爪先で耳をほじらせる等」「捉／強くにぎる」「打／棒で叩く」、

「脱／着けたものを除いて素足にすること」、

「纏／脱の逆で縛り布や靴を着せる」、

「洗／洗ってあげる」「剪／爪を切るなど」、

「懸／縛り布で吊るす」「扶／女を支えて歩く」、

「拉／脚を人力車の柄に見立てて引っ張る」、

「玩／二つの足裏で男性器を摩擦する」「弄／二つの

足裏を重ね合わせてできる隙間に男性器を挿入させる」

●手以外の技巧として

「扶／脇の下で足を強くはさむ」、

「擁／胸に足を抱きしめる」、

「ケン（手偏に肩）／両足を肩に乗せる」、

「暖／冷えた足を股間で暖める」、

「提／女の足を自分の足に乗せて持ち上げる」

……ざっと知ることができたのはこんなところですが、こうした技巧はのべ四十八種あるともいいます。ここに挙げただけでは、まだ四十八には足りませんね。

纏足女性が履く専用の靴・宮鞋／弓鞋もまた男の耽溺の対象であつたらしいです。「そんなことまで？」というようなテクニクがまだまだあるのでしょう。





Morals under a pagoda

古代中国・2

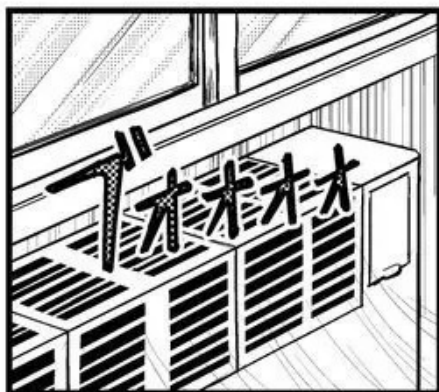
— 宦官のこと —

古代から近世に至るまで、後宮に仕えた宦官たち。もとは刑罰として男性を奪われた者たちがそれゆえの役割を得ると、帝の夜と系譜を預かる立場から権力の中核に深く浸透した。

しかし力を得たのはあくまで上り詰めた高級宦官のみ。

下層の若い宦官らは、その身も命もどう扱われても抗えない地獄のような日々の中を生きた。

時に後宮の女官や皇子らの性の捌け口ともされながら、生き抜くためにすべてに耐え、徹底的に卑屈な媚びた性格を得ていった。



アレを切り取られた中国の
高級宦官＝太監は、皇帝の
後宮に奉仕するのが役割。



古代中国の
後宮には、
皇后以下、
四千人にも
およぶ女性が、



そして、
それに仕える
太監の人数も
四千あまりに
達したという！



敬事房っていう
太監の事務所では、
皇帝の性交した
年月日・時間を
事細かに記録、
管理しててな。

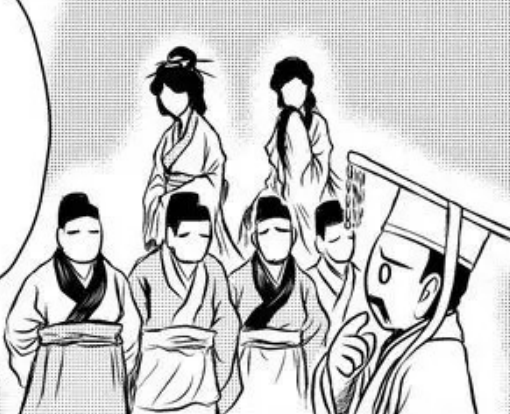


なにその
羞恥プレイ？

妊娠したときに
「たしかに皇帝の子だ」
って証拠のために
必要でな。



だから皇帝が後宮で
好き勝手に女性のトコに
行くのは禁じられててな。



皇帝サマなのにな？

いつ誰と夜を
共にするか、
太監に事前予約
しなきゃ
いけなかった。

フーゾクかよ



予約が済んで
夜になると、
そこからの
流れはこうだ。



お相手となる
女性は
素っ裸に。

絹の布団に
くるみます。



それを太監が負ぶって
皇帝の寝室にゴー。





↑事前に3度コールが入って、それで返事がないとこうなるらしい



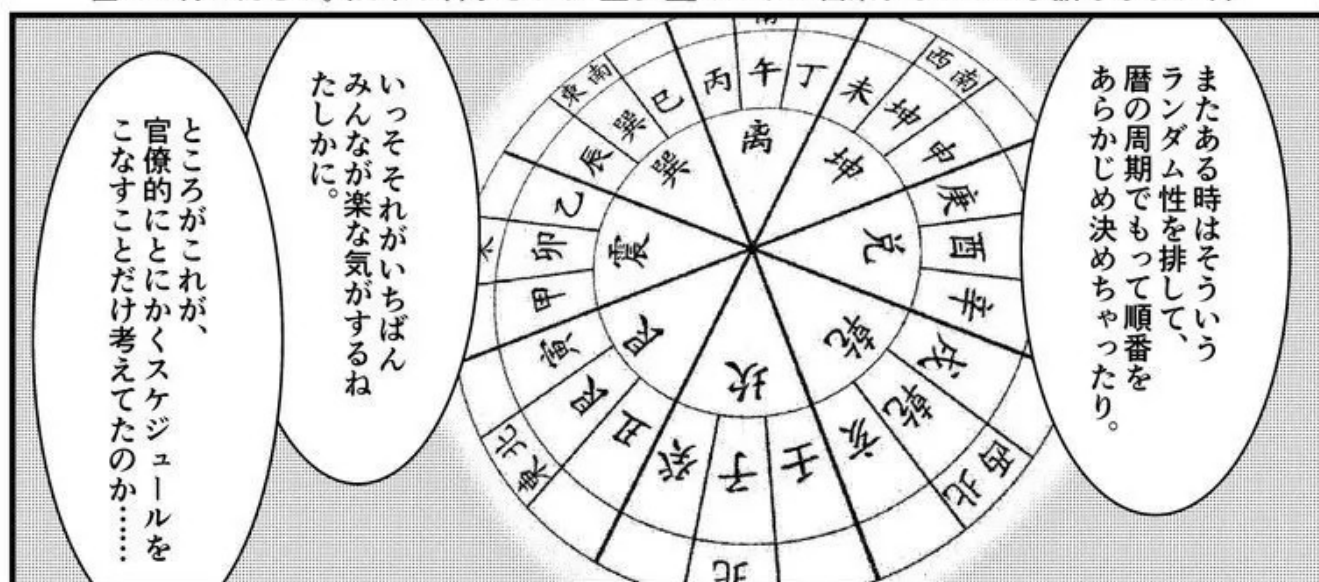


またあるときは羊で抽選。
羊が引く車に皇帝が乗って
後宮を回り――

羊がたまたま止まったトコの
宮女と同衾した、という――
(西晋の武帝の話)

チャレンジルーレットかよ

※宮女は宮女で羊が自分の所で立ち止まるように、羊の好きな真竹の葉に塩水をまぶして置いて待ったとか。(日本の料亭とかの「盛り塩」がこれに由来するっていう話もあるが?)



またある時はそういう
ランダム性を排して、
暦の周期でもって順番を
あらかじめ決めちゃったり。

いっそそれがいちばん
みんなが楽な気がするね
たしかに。

ところがこれが、
官僚的にとにかくスケジュールを
こなすことだけ考えてたのか……

▲周時代のお話



――皇帝が一日九人ずつ
相手しなきゃならない
パターンの時もあったとか。

死ぬね。そりゃ死ぬね。

十代や二十代で夭折した皇帝も
数多くいたというよ。

もう女は
こりごり
だよー！

……ていう感じには
ならなかったのかね、
皇帝くんたちは。

言い出せない空気ってのも
あったのかもしれないねえ

き宦官、夜の宮中にて



春秋時代、中国――



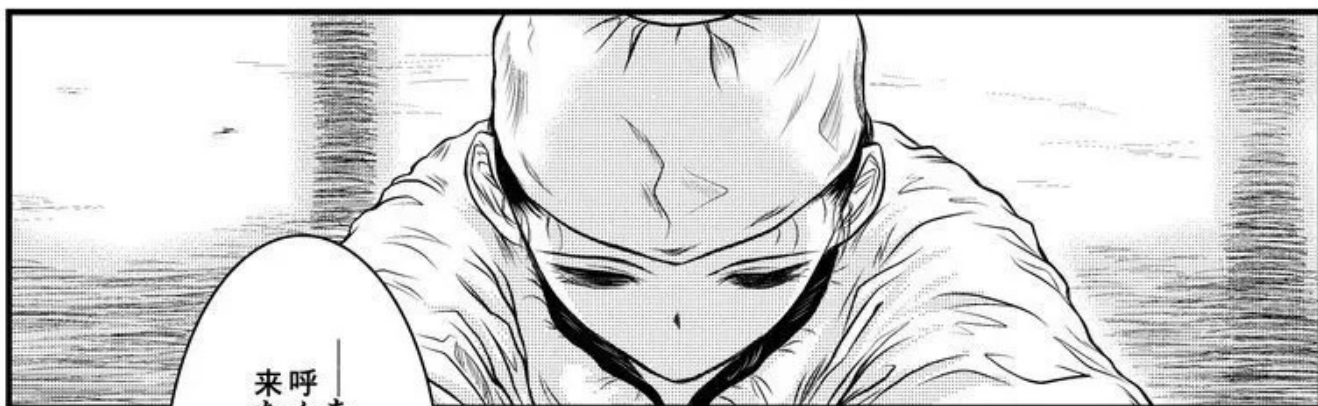
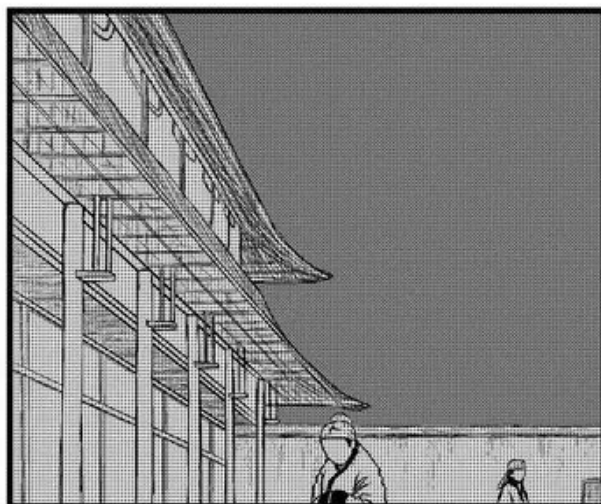
私の名は微仲。
歳にして奴隷として
差し出された。

く職能も無かったから
だろうが、私は労働奴隷
とはされず、後宮に仕える
者を充足するために
宦官とされた。



性を取り除き
宦官となる手術ではまさに
地獄の苦しみを味わった。

それを辛うじて生き延び、
禁中に仕える者となった私を
待っていたのは……



— ああ、
呼んでいた子が
来たわよ、孟丹。





いいか微仲、
よくみておけよ。

後宮
ここの方々はみな、
日ごろその身を
寂しくさせている。

それを我々は
求められればいつでも、
ひそかにお慰めして
さしあげるのだ。

——このようにしてな。

陽物を喪った我々だが
あらゆることをして、
快をもたらすご奉仕を
するのだ。

快楽を引き出す
愛撫を学べ。
言われればどこでも
舐めろ。しゃぶれ。

命じられれば、
あふれ出るモノも
浴びろ。飲め。

美味かと
問われれば
美味と答えろ。

—だから。
よく見ておけよ。

我々が生きていくには、
なんでもして
上の方々に
気に入られるしかない

よく見て
おきなさいって。
フフフ

よく、おぼえておけよ——

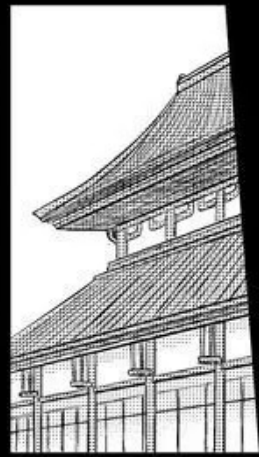
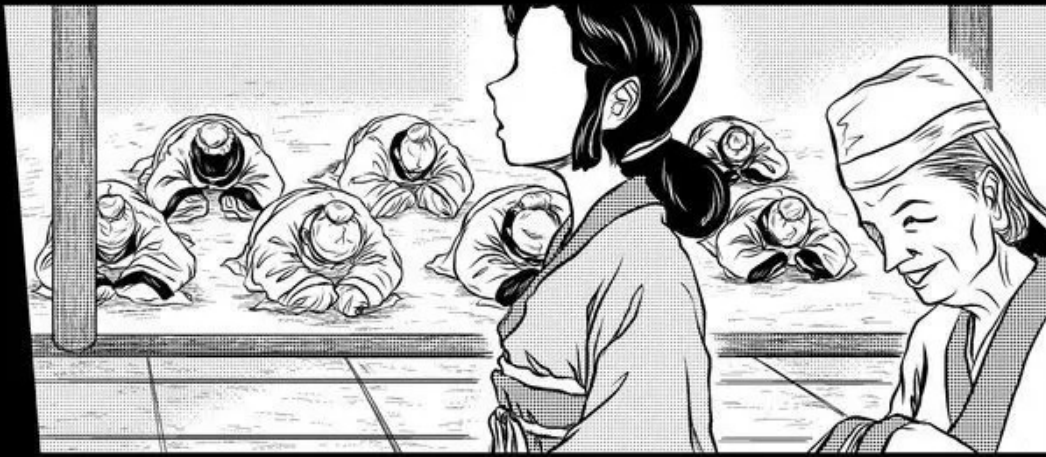
不倫の発生を防止しつつ皇帝、皇太后、
妃嬪たちの世話をさせるよう後宮に
仕えた宦官たちだったが、宮女らは
性のはけ口に宦官を利用した。
男根を喪失したとはいえ「男」である
ことには違いない。

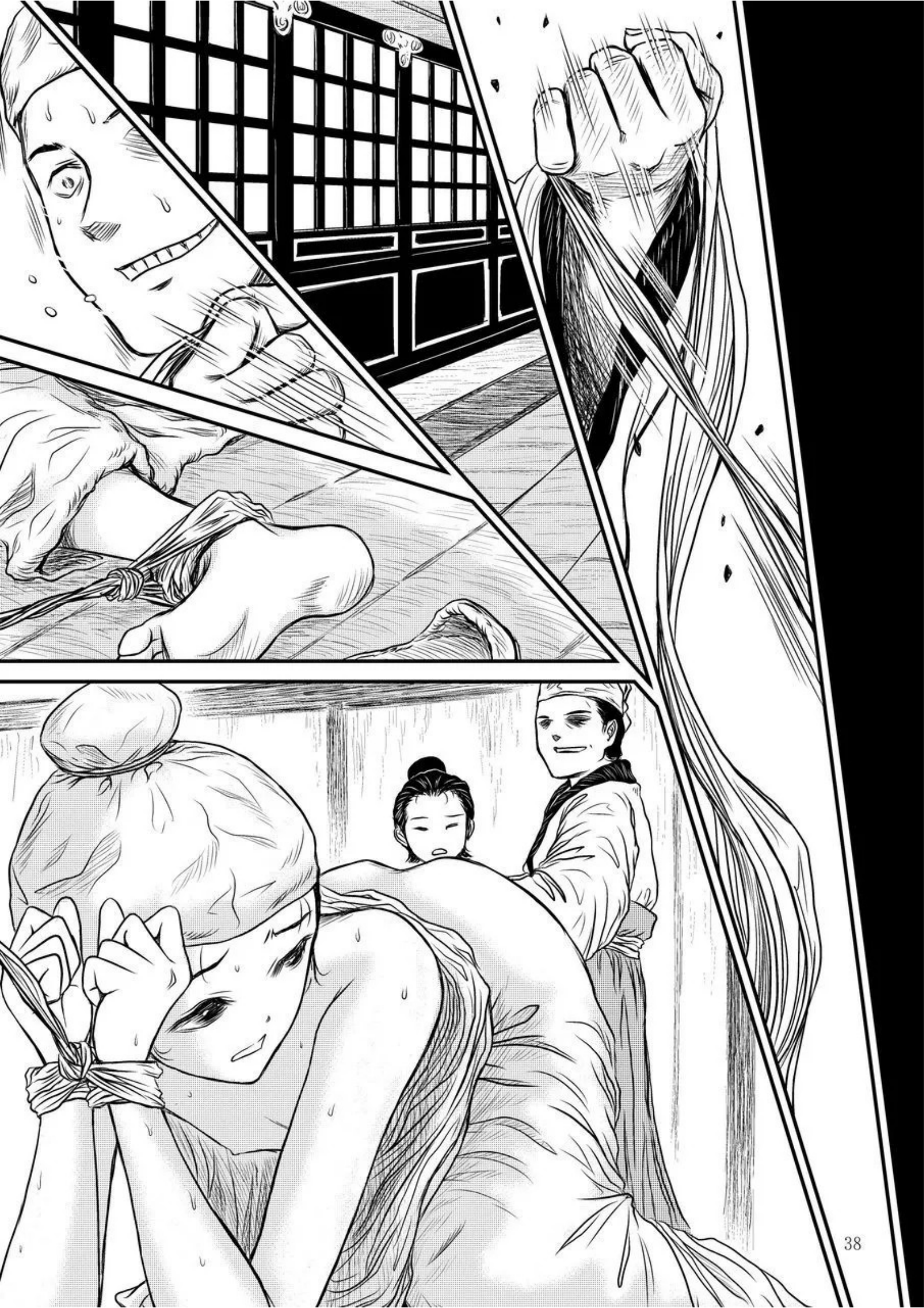
後宮を支配し権勢を得るなど
史上で知られるのは
ごくわずかな高級宦官のみ。

宮中の大半を占める
下級宦官の日常は
悲惨であった。

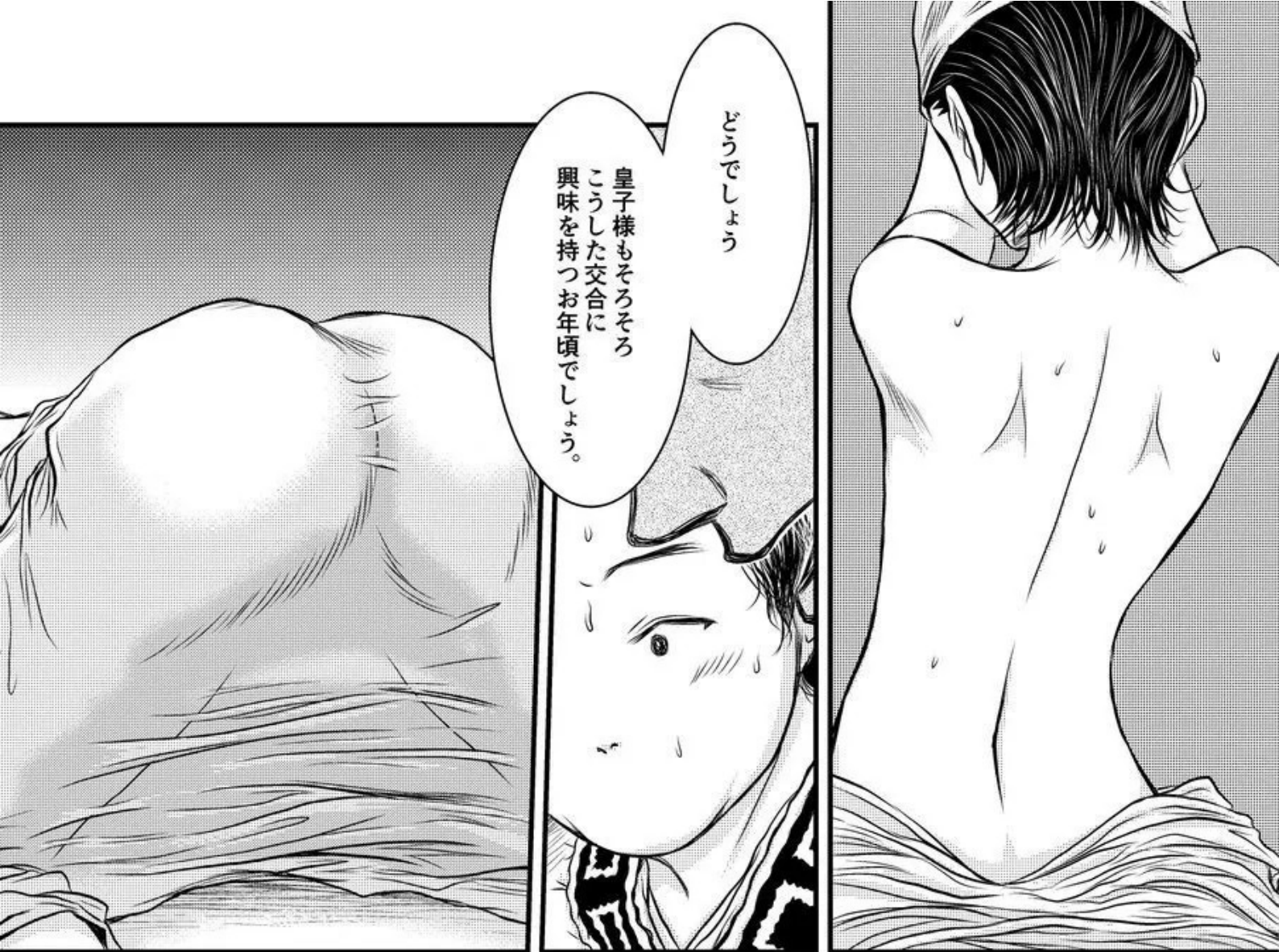
雑役に追われる下っ端は
粗末な上衣を身につけ、
上役の宦官の気分に
その運命を握られる。

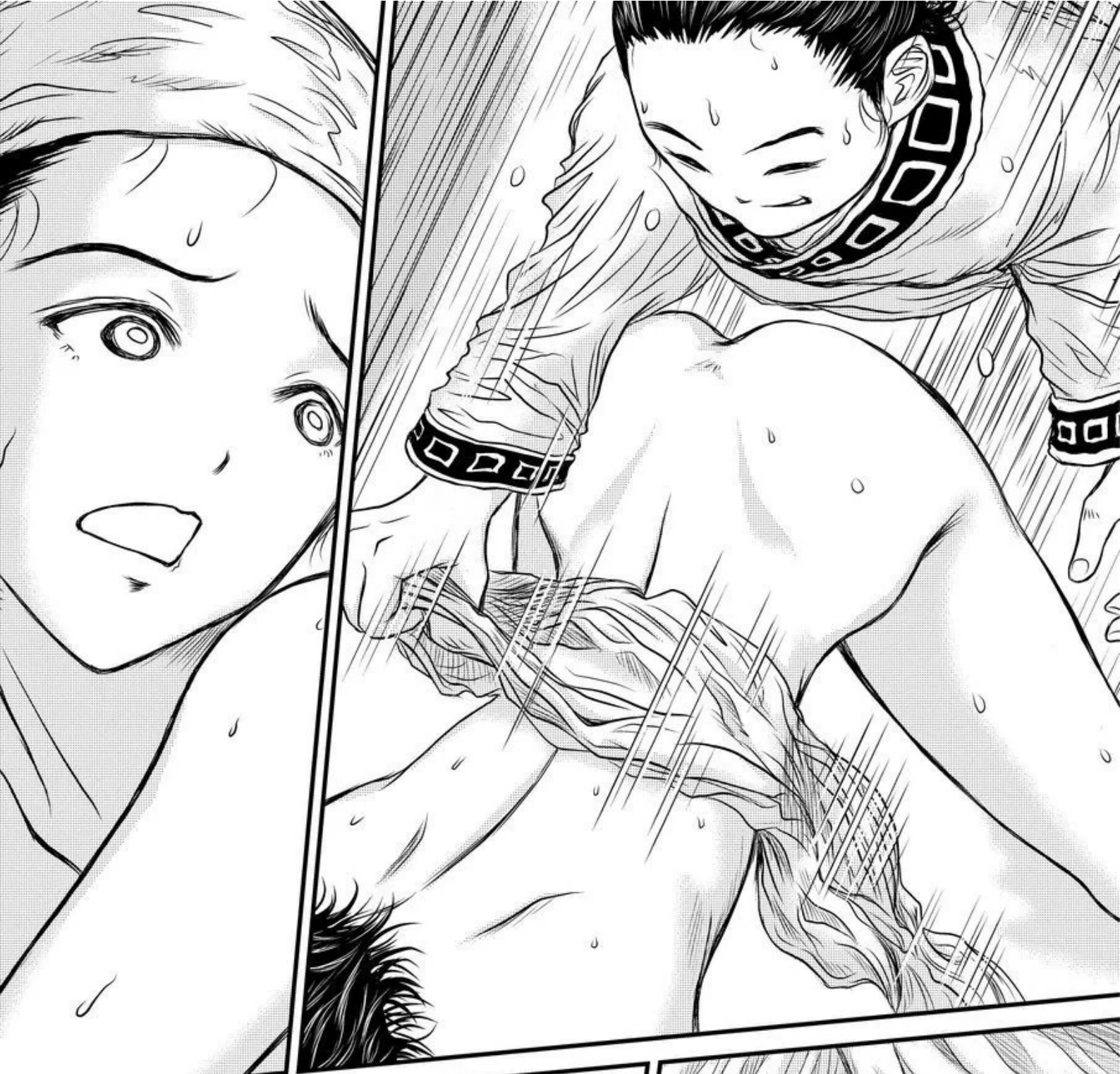
こうした奴隷的生活と
去勢による生理的变化とで、
過剰に媚びへつらう卑屈な、
それでいて時に陰険で粗暴な
性格がでる。



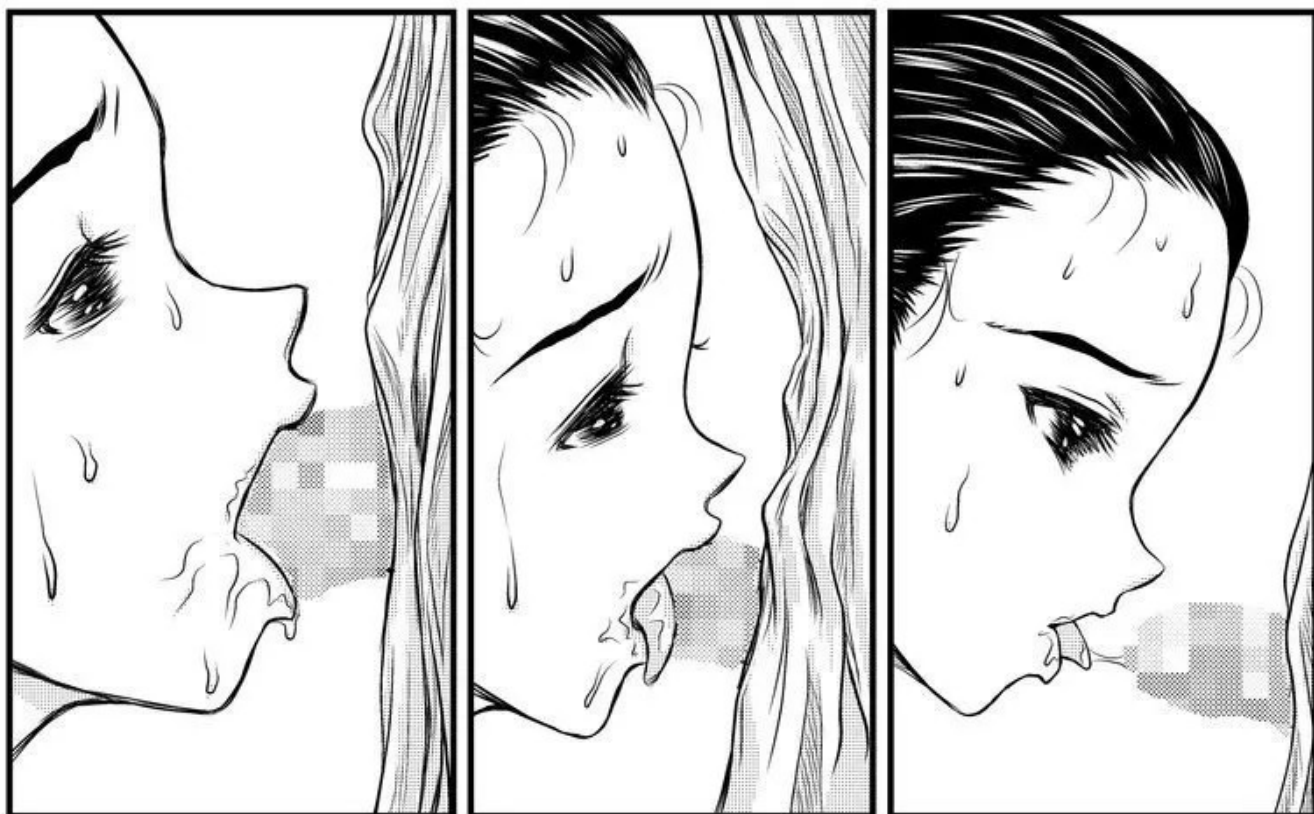




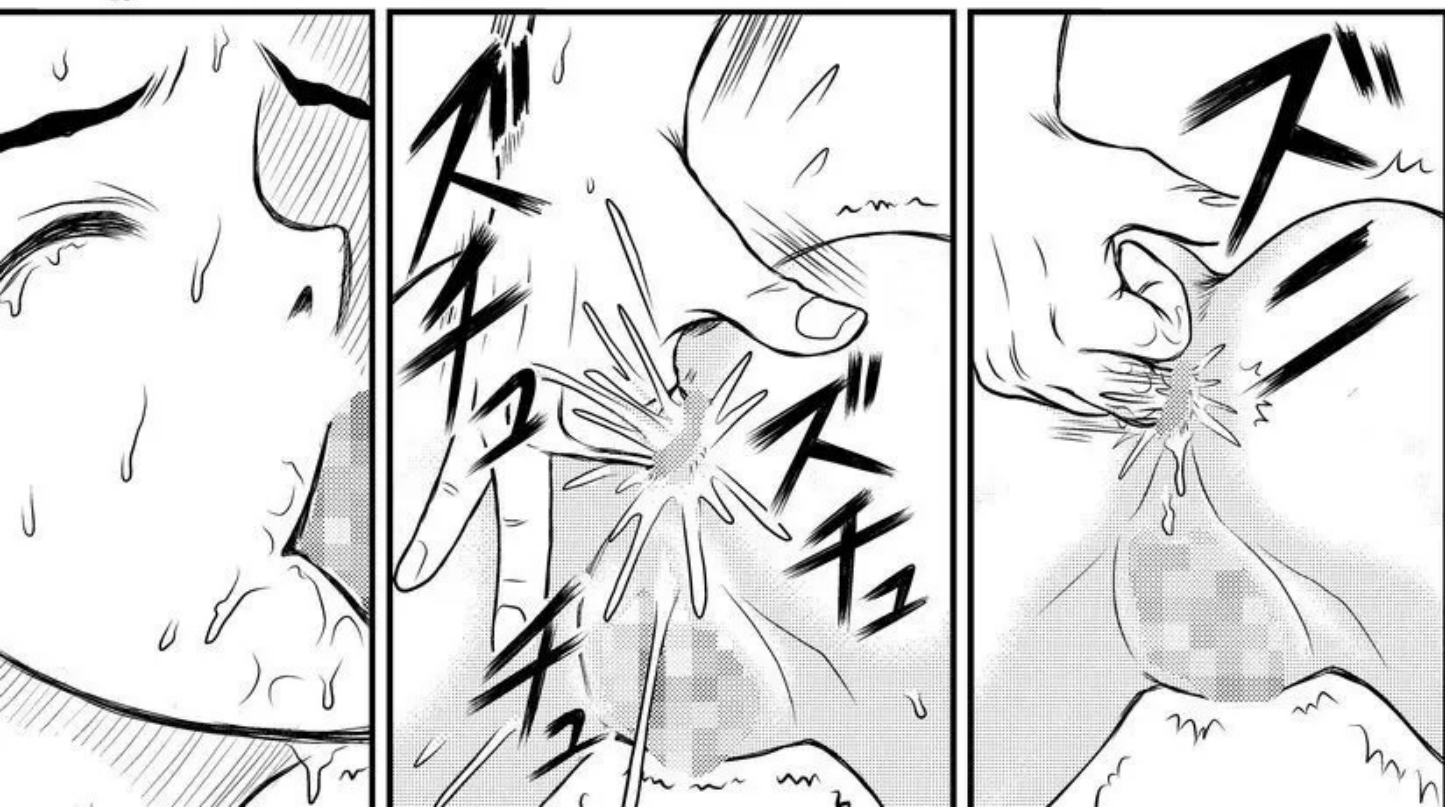






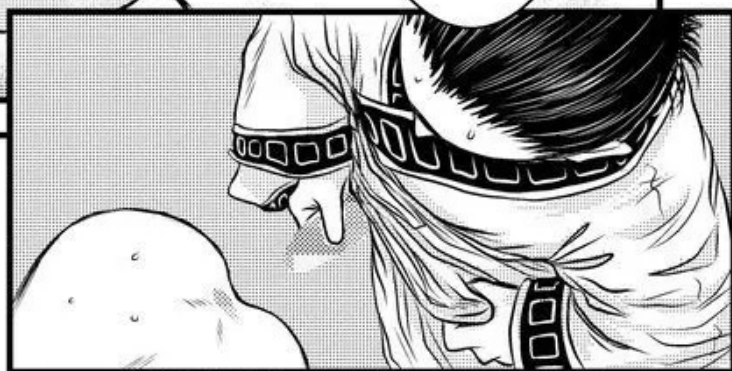


43





ああ、
どうぞ







手術の苦痛に
くらべれば――



く、口で
ぬぐえ！

頑張っ、ここで
生き抜いていくんだ――

■い下級宦官は宮中に入っても
地獄の苦しみが待つ。
上役の意に沿わなければ
ただちに排斥、懲罰、誅殺
などがある恐怖……

だがこの中で高級宦官に
のし上がったなら、後宮を仕切って
大いに権勢を振るったのだった――

◆古代中国の性愛史いろいろ

ここでは巻末余話として、漫画本編からこぼれた古代中国の性風俗の諸々について、いくつかピックアップして紹介してみましよう。

◆初期儒学の性愛

儒教というと、性に対して禁欲的だというイメージがあるかもしれませんが、でも実はこれは、後世の儒学者たちが持ち込んだ歪曲の結果だといえます。

実は儒学の草創期、つまり孔子や孟子らの頃ですが、当初、儒学では好色は人間的な当然の本能・欲求だとし、「徳」や「礼」と対立せず同一線上に置かれていました。

「好色、人之所欲（好色は人の欲する所なり）」

……孟子・万章上

「食色、性也（食欲と性欲は人間の本性なり）」

……孟子・告子上

「飲食男女、人之大欲存焉

（飲食と男女は人間の大きな欲望だ）」

……礼記・礼運

と、こんな言葉も残っています。

そも、「色」という字は人の上に人をのせた形で、

元を辿れば女色・性交を意味するといいますが、

「徳」という字もまた、古来性的魅力を表す意も含んでいたといえます。

◆原始文化の性器崇拜

過去このシリーズでも幾度か触れてきていますが、世界各地の原始的な文明世界では、豊穡の象として性器そのものを崇拜対象とする信仰形態が多く存在しました。現在まで残っているものも多々あります。

中国の原始文化にも、こうした性器崇拜の信仰はありました。

原始農業社会における母系社会において、女性崇拜とともに女性器崇拜も生まれたようです。

その原始的な崇拜モチーフとして、瓢箪があります。実が母親の腹のように丸くなり、中には種がたくさん入っているということで、生殖と多産のシンボルとされました。

同様に男性器崇拜もあり、「且」の字は、男性器を表す象形文字だったといえます。そこから、甲骨文字の「祖」の字は、人が膝を折って男根に礼を捧げる形態と考えられるのだとか。

◆宦官の起源

今回 漫画本編でテーマとなっている中国の宦官。甲骨文字の記録によると殷の武丁王時代（紀元前一四〇〇年頃）にすでに宦官がいたといえます。

古代エジプト、ギリシア、ローマ、トルコや朝鮮半島にも存在した宦官ですが、中国では古代歴代王朝の政治や後宮の生活と密接に結びつき、特異に発達した制度を作り上げました。

もとは、戦争捕虜とした異民族の男に去勢を施して労役に従事させたことから始まったものですが、のちに皇帝たちが宮廷・後宮の皇太后、妃嬪たちを世話する役割を課すようになりました。

疑心の多い王朝内にあって、後宮の世話をさせつつ内部での男女の醜聞を未然に防ぐには、去勢され生殖能力を失った男たちは有用だったのです。男と宮女の間の不倫を防止し皇族の血統を保存してゆくために、宦官はこうして不可欠な存在となりました。

宦官の供給源は、古くは刑罰として去勢を強いられた罪人たちが主でした。この刑罰（宮刑）は死罪に次ぐ重いものとされました。

「宮刑」とは宮廷やその付属機関で終身働かされる刑罰のことで、そのままイコール去勢の刑（腐刑）ではなかったものの、宮廷で労役に就くためには先述の理由で不祥事防止の腐刑がセットで付いてきたため、同一視されるようになったともいいます。こうした理由のため女性が「宮刑」を受けた場合には、強制労働以外の何かが課されることは無かったようです。

宮刑による去勢の処置は罪人に対するものということで、十分な医療措置を与えるはずも無く、その死亡率も当然高かったものと考えられます。

また別に、貧困な下層民の少年が半ば奴隷として差し出されることも少なくありませんでした。日々糊口をしのぐことすら難しい下層民の子供が、どのみち望めぬ結婚の可能性を捨てることでどうにか生き残るために選ぶ／選ばされる道でした。

ところが後に、受刑後の宦官が宮廷で重用されることが多くなると、自ら望んで去勢し（自宮）、宦官となる者が増加しました。手術を受ける代金をなんとか工面し、立身出世をそれに賭ける。

そんな宦官志願者はいっぱいに溢れかえるようになり、そのため隋代には宮刑が一旦廃止されました。

自宮の増加にともない去勢手術の技法も洗練されて行き、清代には死亡率は1%未満まで下がったといえます。

(手術の詳細などけっこうえげつない部分も記録が多く残っています。興味ありましたら調べてみてください)

なお、一旦廃止された宮刑は明代にまた復活し、政府の高官から塩を作る人夫まで、さまざまな階層の男性がこの刑に処せられた一方、明代の後宮には十万人の宦官がいたといえます。

◆宦官たちの逸話

男性を失った宦官は、生理的な変化とともに男性の気質まで喪失していきます。

宦官はあたかも女子のようで、年老いた宦官は前に倒れるかのようによろよろと歩く姿もみすばらしく、まるで男装した老婆を髣髴とさせる奇怪なものだと評されました。

残忍な方法で廃人とされ、普通の人間の享受する楽しみから切り離された彼らは、宮中で貴人や上役の不興を買えばいついびられ殺されるかも知れない生活の中で精神も削られます。そうして卑屈な奴隷根性を身につけさせられる一方、異常に粗暴になったり、情緒の起伏が激しく陰険で裏表がある性格に育つことが多いといえます。

そして、そもそもスキャンダルの防止を目的に始まった宦官の後宮務めですが、男根を喪失したとはいえ「男」であることには違いなく、皇帝の寵愛の無い宮女らの性の捌け口として使われたといえます。また美形の宦官が、年の皇帝の「女」代わりにも利用されることもあったというのは、マンガ本編にも描いた通りです。

そしてこれは驚きの話ですが、年時代に切られた男根は、後にある程度再生することがあるのだそうです。

「玉茎重生」といって、再生した場合のソレはサイズも女性と十分に性交できるほどにまでなるのだとか。

生物ってすごいですね。

明代の宦官・魏忠賢がその「重生した玉茎」で、皇帝の乳母である客氏と和姦したという話があります。

また事実、宦官の歴史を紐解いてみると、名高い宦官の中には妻妾までもうけて結婚した者も数多くいました。

楊貴妃と密通した高力士は呂氏美人を夫人に迎え、夫人亡きあとに豪華な墓を作っていますし、西太后と宦官・安得海の関係もよく知られています。

前述の他、その悪徳で語られる有名な宦官に、安得海と同じく西太后に仕えた清末期の李蓮英、明の劉瑾、唐の李輔国、秦の始皇帝時代の趙高などがいます。

対して賞賛とともに名を残した宦官には、宮刑で宦官となった歴史家司馬遷、製紙術を発明した蔡倫、航海王と呼ばれる鄭和などが挙げられるでしょうか。

◆古代中国の妓女

妓女、すなわち女色と芸技で男性に性的サービスを提供する女性については、中国においても他の代表的な古代世界と似たような経緯で発生したものと考えられます。

つまり、まず巫女のような宗教的な歌舞・儀式のために置かれた女性の中に性を提供する役を担う者が現れ、その後金銭・財物によって肉体を提供したり、宴席で歌、舞、楽の技芸を披露するなど色々な形の娼妓へと変わっていく……というパターンです。

古代中国では、官妓、宮妓、家妓、私妓などの形態がありました。

「官妓」は地方官庁で催される多くの宴席で歌舞や音楽を提供し、一般的に売春はしなかったといえます。

このほか、公的に政治によって制度化された娼妓はこれも広く官妓と総称されますが、これが確立したのは紀元前六八五年頃、周の莊王十九年だと、王書奴の「中国娼妓史」にあります。

「宮妓」は宮殿だけで歌舞を提供する妓女であり、皇帝のために準備された官妓の一種だといえます。

「宮妓」も官妓の一種で、軍宮に設置された妓女で、軍妓とも呼ばれます。

「家妓」は家庭で養成した妓女であり、漢の時代に発達し、南北朝の時代に隆盛した自家用歌妓でした。幼い時から厳格な訓練を受け、豊富な文化的素養と歌舞芸術の修養を積んだといえます。彼女らは家中の宴会で楽器を演奏し、歌舞によって娯楽を提供しました。

貴族や王族は歌妓を十数名も囲っていたといえます。

「私妓」とは、私的に肉体を売る女性のことで、一般的な意味での売春婦にあたります。

唐の玄宗元年以来は、長安と洛陽に内教坊なるものが設置され、専門歌妓を養成しました。

人が集まり富む地にはしばしば妓院が作られ、そこには妓女たちが居住し、彼女らとの時を楽しみたい貴人らが訪れました。

文化的教養を備えた高級妓女たちは、精神的恋愛や交流を求める貴人や文士らに尊ばれました。肉欲を満足させる方法なら他にいくらでも持っていた富裕者たちにとっては、彼女らの前では性的交渉はさほど重要ではなかったのだと。

……あつ。肉食の風俗とかについても書きたかったけどスペースがもう無いや



後 書



この漫画をご覧いただきまして、ありがとうございます。

この漫画は「世界歴史性風俗シリーズ」として、歴史上の性の習俗における特殊な～現代の我々から見て時に奇異に映る～部分を取り上げて、成年向け漫画にしているものです。

基本、即売会などに合わせて同人誌の形で発行しておりまして、これはそれらをそのままデジタルデータにしたものとなっております。

これまで いくつかの地域 時代を舞台にシリーズを続けておりまして、本作はそのうち古代中国を題材にした二編をひとつにまとめた「古代中国編」です。

他にもこれまで「古代メソポタミア編」「古代インド編」「古代エジプト編」「古代ギリシア編」「古代ローマ編」と展開してきました。

シリーズを通してどのエピソードもそれぞれ独立した話になっていますので、好きなところから読んでいただけます。気になるテーマや時代 地域のものがありましたら、シリーズ順などは気にせず触れていただけましたら幸いです。

当シリーズで古代を舞台にするのはこの「古代中国編」で終わりとなり、つづいて中世へと時代を移していく予定です。

今後も時代 地域を変えながらさまざまな舞台でシリーズを広げていくつもりですので、どうぞよろしくお願い致します。

横弥 真彦

■本書は18歳未満の方にはご覧いただけません■

発 行：1000decillion センデシリオン

発行日：2016年 2月 15日

連絡先：yokom i@ sh ibakuri.net

<http://www.shibakuri.net/>

Twitter：@ 1000decillion

横弥 真彦